**季節**

季節情報 Ｎｏ．１
令和８年５月 28 日

# 梅雨期の農作物栽培技術対策

東備農業普及指導センター

梅雨期〔梅雨入り（昨年：５月16日頃、平年：６月６日頃）、梅雨明け（昨年：６月27日頃、平年：７月19日頃）〕を迎えるにあたり、長雨及び日照不足による農作物への影響が懸念されます。

令和８年５月21日広島気象台発表の中国地方の１か月予報によると、期間の前半は天気が数日の周期で変わり、気温がかなり高くなる見込で、後半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、向こう１か月の気温は平年より高い確率が70%、降水量は平年並または多い確率がともに40%、日照時間は平年より少ない確率が40%、平年並または多い確率がともに30%となっています。

つきましては、今後の気象状況や農作物の生育状況に十分注意し、本対策を参考に適切な管理をお願いいたします。

## １　水稲

・大雨等で冠水した場合は、水面上に葉が出るように排水に努める。
・除草剤散布後に大雨が予想される場合は、散布時期を遅らせる。
・湛水状態が続くと土壌中でガスの発生が多くなるので、田植え後１か月を目安に中干しを行い、根の活力と根張りを向上させる。中干し後は間断かんがいにより、根傷み防止に努める。
・ジャンボタニシの発生田では、田植え後20日間の浅水管理や薬剤防除などの対策を行う。
・梅雨期後半は、いもち病が発生しやすい気象条件になりやすく、加えて苗箱施用剤の効果が低下する時期なので、初発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。また、補植用苗、余り苗は伝染源となるので、早めにほ場から除去しておく。

## ２　麦類

・週間天気予報等を参考に計画的な収穫作業を行う。
・二条大麦は、刈り遅れると退色粒、カビ粒、剥皮粒等の発生により品質を低下させるので、遅滞なく刈り取る。
・小麦は、高水分で収穫すると損傷粒が多くなり、刈り遅れると降雨にあう機会が増え、退色粒、発芽粒、くされ粒などが発生し品質が低下するので、適期収穫に努める。
・倒伏や病害等で品質低下がみられたほ場は必ず仕分け収穫を行う。また、共同乾燥調製施設を利用する場合は、全体の品質を低下させないために必ず仕分け乾燥を行う。

・高水分時の乾燥は熱損粒が発生することが多いので、送風温度はやや低めから始め、水分の低下とともに徐々に温度を上げる。

## 3　大豆

・播種や移植作業を円滑に行うため、ほ場準備は早めに行い、額縁明きょに加え、ほ場内に排水溝を設置し、排水性を高める。
・大豆は播種直後にまとまった降雨があると発芽不良になりやすいので、降雨が予想される場合は播種を遅らせるなど、週間天気予報等に留意しながら慎重に播種する。
・播種と除草剤（土壌処理剤）散布はできるだけ一貫作業で行い、初期の雑草発生を確実に抑える。
・降雨が続き、中耕・培土作業ができない場合は、必要に応じて除草剤（茎葉処理剤）の散布を行う。

## 4　果樹

(1)もも

・ももは湿害に弱いので、園地周辺の排水路や明きょの点検、整備を実施することで、停滞水を速やかに排除する。
・核割れや生理的落果を防ぐため、核割れ対策のための部分マルチ（４×４ｍ程度、多孔質防水シート）を硬核期前から敷設する。また、収穫後には速やかにマルチを除去する。
・新梢が徒長して樹冠内が暗くなっている樹では、摘心や枝吊り等の枝管理を徹底して、結果部位の日当たりの向上に努める。
・結果量が少ない場合は、新梢が徒長しないように枝管理を徹底する。
・降雨が続くと病害の発生が懸念されるので、袋掛け前の防除を徹底する。

(2)ぶどう（ハウス栽培）

・ハウス内に雨水が入らないように点検、整備を行う。また、ハウス内の湿度が高くならないように換気に努める。降雨や多湿が続く場合は、裂果や腐敗防止のため加温機や循環扇があるハウスでは稼動して、湿度の低下や結露の防止を図る。
・果粒肥大期に日照不足が続く場合は、副梢管理を十分に行い、果粒肥大を促す。
・硬核期に水分が過剰になったり、梅雨の晴れ間の高温が予想される場合には、「シミ」、「縮果症」及び「日射症」などの生理障害が発生しやすいので、かん水を控えめにするとともに換気に努める。
・糖度上昇を促し成熟を遅延させないため、果粒軟化期の直後までに適正着果量にし、副梢が再伸長する場合はこまめに摘心する。
・灰色かび病等の防除を徹底するとともに、裂果や腐敗果は除去する。

(3)ぶどう（簡易被覆栽培）

・園内の停滞水を速やかに排除するため、園地周辺の排水路や明きょの点検、整備を実施する。
・結実対策の花穂整形や新梢管理を徹底し、必要に応じてジベレリン処理時にフルメッ

ト液剤を加用して結実を確保する。また、開花期の日照が少ない場合は、摘心節を基準より短くし結実対策を徹底する。
・果粒肥大期に副梢の伸長が続く場合は、副梢管理を十分に行い、果粒肥大を促す。
・花冠が残っていると灰色かび病が発生しやすいため、できるだけ取り除く。
・灰色かび病、黒とう病、べと病、晩腐病等の防除を徹底する。また袋掛けを早めに実施する。

(4)なし
・園内の停滞水を速やかに排除するため、園地周辺の排水路や明きょの点検、整備を実施する。
・梅雨期は新梢が徒長しやすいので、摘心、誘引などの枝管理を実施して、樹冠内部の日当たりをよくする。将来、側枝として活用できる発育枝は、６月下旬～７月上旬に45度程度に誘引する。
・小玉果がみられる園では、早めに結果量調節を行い、果実肥大を促す。なお、結果量が少ない場合は新梢が徒長しないように枝管理を徹底する。
・袋掛け前まで黒星病等の防除を徹底する。

## ５　野菜

(1)なす
・停滞水による根腐れを防止するため、ほ場周囲の排水溝を点検、整備し、排水対策を行う。
・光量不足になりやすいので、整枝、摘葉を適正に行い、採光をよくする。ただし、降雨直前及び降雨中は整枝、摘葉を控える。
・肥切れをさせないよう追肥を行い、草勢を維持する。
・過湿状態から乾燥状態へと土壌水分の急激な変動によって日焼け果、つやなし果が発生しやすいので、土壌水分の管理に留意する。
・曇雨天が続き花質が低下した場合は、着果促進処理を行う。また、灰色かび病や褐色腐敗病等の早期防除を徹底する。

(2)いちご
・炭そ病等の対策として高設雨よけ育苗を基本とする。
・根腐れや疫病等の発生を抑えるため、育苗ポットの過湿に注意し、育苗ポットの設置場所の排水対策を行う。また、専用シート等を敷いて土の跳ね返りを防ぐ。
・ポットの培土が固結するようなら、ポットの腹をつまんで軽くほぐす。
・降雨の合間にうどんこ病、炭そ病等の防除を行う。

(3)トマト
・雨よけなどの施設栽培では、施設内に雨水が浸入しないよう、施設周囲に排水溝を整備する。排水溝とその周囲にポリフィルムを敷設すると、土砂の流入を軽減できる。
・曇雨天が続く場合は、心止まりや根傷みに注意し、施肥量やかん水量を調節する。
・芽かき、誘引、追肥を遅れないように実施する。ただし、降雨直前及び降雨中は芽かぎ、誘引を控える。

・５～６段花房あたりに異常主茎による心止まりが発生する場合があるので、４～５段花房あたりの腋芽を一つ残しておき、正常な生育を確認後に除去する。
・訪花昆虫を導入しているほ場でも、曇雨天が続き花質が低下した場合は、着果促進処理を行う。また、灰色かび病やすすかび病、葉かび病等の早期防除を徹底する。

(4)きゅうり
・停滞水による根腐れを防止するため、ほ場やハウス周囲の排水溝を点検、整備し、排水対策を行う。
・梅雨期に定植する作型では、計画どおり定植できるように、早めに耕耘、畝立てを済ませ、ポリマルチや古ビニルで畝の表面を覆っておく。
・整枝、誘引を早めに行い、通風、採光を良くする。ただし、降雨直前及び降雨中は、整枝、誘引を控える。
・べと病、褐斑病、炭そ病、うどんこ病等の早期防除を徹底する。
・病害に侵された葉は早めに摘みとってほ場外に持ち出し、伝染源を除く。

(5)かぼちゃ
・停滞水による根腐れを防止するため、ほ場周囲の排水溝を点検、整備し、排水対策を行う。
・疫病、うどんこ病等の早期防除を徹底する。
・草勢が弱い場合には速効性肥料の追肥を行い、草勢を強めて果実の肥大を促す。
・追熟中に疫病等による腐敗果の発生が心配されるので、選果と貯蔵中の管理を厳重にする。

(6)アスパラガス
・停滞水による根腐れを防止するため、ほ場周囲の排水溝を点検、整備し、排水対策を行う。
・倒伏防止と風通しをよくするため、茎葉（親茎）が伸びきったら、晴天日に畝面から140～150cmの高さで摘心する。
・立茎開始直前から定期的に茎枯病の防除を徹底する。
・茎枯病が発生した場合は、被害茎葉を地際部から抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。

(7)だいこん
・ほ場周囲の排水溝を整備し、排水対策を徹底する。
・土づくりを十分に行い、播種準備を早めにして計画的に播種する。
・降雨の合間をみてキスジノミハムシや軟腐病等の適期防除に努める。

## ６　花き

(1)りんどう
・過湿による根の傷みを防ぐため、ほ場周囲の排水溝を点検し、排水対策を行う。
・降雨後、ほ場内の停滞水を速やかに排水する。
・葉枯病、褐斑病、灰色かび病等の病害が発生、増加しやすいので、薬剤散布による予防に努める。

・不要な側枝の発生等により過繁茂になっている部分は整理を行い、風通しを良くする。
・カルシウム欠乏による葉先枯れの発生が予測される時はカルシウム剤の葉面散布を行っておく。
・急速に草丈が伸長する時期のため、ネット上げ等の管理が遅れないようにする。
・降雨により支柱が傾いてネットが緩みやすくなるので、早めに補強、補修を行う。

(2)きく、小ぎく
・停滞水による根腐れを防止するため、ほ場やハウス周囲の排水溝を点検し、排水対策を行う。
・降雨が続くと根の機能が低下し、養分吸収が悪くなるので、葉面散布剤を適宜散布し、生育の促進を図る。
・梅雨期には黒斑病や白さび病等の病害が発生しやすいので、薬剤散布による予防に努める。
・カルシウム欠乏による葉先枯れの発生が予測される時はカルシウム剤の葉面散布を行っておく。
・親株も同様の病害が発生しやすいので、採穂前には必ず防除を行う。

(3)施設花き（トルコギキョウ等）
・施設周辺の排水に努め、施設内への浸水を防止する。
・曇雨天が続くと灰色かび病等の病害が発生しやすいので、薬剤散布の実施や施設内の通風、換気を図る。自家採種している品目（スイートピー、ラークスパー等）も同様に行う。
・カルシウム欠乏による葉先枯れが発生しやすい品目は、窒素過多にならないよう施肥に注意し、発生が予測される時はカルシウム剤の葉面散布を行う。

## 7　飼料作物

(1)トウモロコシ
・耐湿性が弱く、湿害により生育不良となるので、排水不良が懸念される水田転換畑等では、あらかじめ排水溝の設置や既存排水路の掘り下げなど行い、地表水を迅速に排除し、湿害防止に努める。
・追肥をする場合は、５～８葉期に窒素を成分量で10a当たり５kg程度施用する。追肥の際、葉の表面が濡れていると、肥料が葉に付着し葉焼けの原因となるので注意する。

(2)ソルガム
・耐湿性がやや弱いので、排水不良のほ場では、あらかじめ排水溝の設置等により、ほ場の地表水を迅速に排除し、湿害防止に努める。
・一番草の刈り取り高さは10cm程度とし、再生を図る。
・幼植物には、青酸含量が多いため、草高60cm以上になってから利用する。

## 8　家畜

・梅雨期の畜舎内は高温多湿になりやすいので、牛舎の開放、強制換気により畜舎内の通気を良くし、湿気がこもらないようにする。

・牛床の汚染は乳房炎発生などの疾病の原因となるので、こまめな除ふんと敷料の交換等により、牛床を乾燥させる。
・畜舎周辺の排水路、堆肥舎、尿溜などの点検整備、雨どいの修理、運動場の泥ねい化防止や薬剤散布等を行い、衛生害虫の発生を防止する。